

## 第二節 災 害

### 一 太平洋戦争末期における小松島

#### 1 終戦直前の辛苦の生活

当時、庶民の日常生活は、鉄器、真鍮、金、銀、銅等の金属類の献納。建艦献金、飛行機建造献金等の募金。貨幣の変質と増発、使用制限。国・公債の増発と強力な購入勸奨。物価騰貴の抑制と強力な取り締まり。主食、酒、煙草、塩、砂糖等の配給割当制。衣料品購入時の切符制と購入抑制。休閒地の全面利用と山野の開拓。等が極度に制約され次第に強制されたが、粗衣・粗食に甘んじた国民は「ほしがりません かつまでは」をモットーとして頑張り抜いたのである。

この間における農業者は、人手不足と資材・肥料の不足に困惑したが、極力、食糧の増産に狂奔し、逐次、減収のやむなきに至っても、自家消費量を割いて供出割当に満たし、わずかの配給食糧により飢えをしのいだ。従って、こうした状況下においては、わずかの空地もことごとく耕されて甘藷を栽培し、邸内の植木を伐採して菜園にする程であった。特に終戦直前においては、田の草取りの最中に米軍戦闘機が襲来し、急いで泥沼の中に這いつくばんで難を免れた人々が各地で見られたことであった。

漁業者は石油の配給が思うようにならないので、櫓をこいで出漁した者もあり、失業した者もあった。

工業者は軍需工場に狩り出され、商業者は物資不足により商業が成り立たず勤労奉仕に出勤した。各学校は一部の授業を放棄して出征軍人の留守家庭の勤労奉仕に出勤し、校庭や運動場を開墾して甘藷を栽培し、児童・生徒の弁当をも点検して「ぜいたくは敵だ」を合言葉に、その量と質に制限を加えた。

また、各交通機関もまた制約を受け、石油不足の対応策として、薪炭を燃料としたノロノロ運転を余儀なくされた。

その頃和田島にあった小松島海軍航空隊においては、航空機燃料として大場八幡神社境内で松根油の製造をしていた。

#### 2 戦争末期の小松島

太平洋戦争となつてからは多数の在郷軍人が応召、その歓送に暇がない程であった。戦争が拡大し熾烈を極めるに従つて、軍籍にある者は殆んど応召し、国民も国家総動員の態勢をとり、身を賭けて戦争遂行に全力を尽くした。

戦争末期には、米軍艦載機の襲来やB29の編隊飛行が度々繰り返され、小松島市においては、昭和二〇年五月二日、和田島の漁船が出漁中に米軍戦闘機の機銃掃射を受け、死者三名を出した事もあり、本市上空で小松島海軍航空隊と米軍戦闘機との空中戦も演じられた。昭和二〇年六月二日にはB29の大編隊が襲来し、その中の一機から小松島海軍航空隊に対して数個の爆弾が投下され、死者三名、重軽傷者数名を出し地面に数個の大穴をあけられた。また、他の一機から中田町新開に爆弾を一個投下され重軽傷者を出した。

日支事変及び太平洋戦争における小松島市の戦没者は、旧小松島町七〇二名、旧坂野町三六九名、旧立江町一五四名、計一、二二五名であった。

終戦後、進駐軍によって強制的に召集された小松島市民は、小松島海軍航空隊を始め、各地に点在する軍需施設の撤去に勤勞奉仕作業をさせられた。この時の心情は到底筆舌に尽くし難いものであった。

## 二 北海道地震

日支事変及び太平洋戦争に幾多の出征兵士を送り出し、多数の戦没者と未帰還兵を抱えて敗戦を迎え、一億国民が虚脱放心、呆然自失に陥っていた昭和二十一年二月二日午前四時一九分、突如として天地を震撼せしめた北海道地震は、人々を驚愕の淵に落とし入れた。震源地は潮岬の南方五〇キロメートル（東経一三五・六、北緯三三）深度三〇キロメートルの海底であつて、マグニチュード八・一、徳島での震度五（強震）の激しい水平動であり、戸外に出ても立つて居られない程の強震であつた。人々は運を天に任す以外なす術もなかつた。

この大地震は、四国地方・近畿地方を中心として中部地方・九州地方にも及んだのであつて、地震とこれに伴う津波の脅威は人的にも物的にも甚大な被害をもたらしたのである。この時の津波の波高は紀伊半島の南端で六・九メートル、三重・徳島・高知の沿岸で四メートルに達し、遠くハワイやカリフォルニアにおいても七センチメートルから二五センチメートルにも達したとのことである。

### 1 小松島市における地震と津波

小松島市においては、この地震により海岸線の沈下七〇センチメートル、和田ノ鼻で一〇一五メートルの汀線後退があり、地盤の変動が著しく、新港岸壁では約四〇センチメートルの沈下が各所で見られ、港町の路上には幅二〇センチメートル、長さ五〇メートルに及ぶ数条の亀裂が生じた。この時、立江寺の多宝塔の九輪が倒壊し

た。なお、この年一二月より翌年にかけて人体に感ずる余震が一二一回、無感余震三五三回が記録され、年末厳寒の折にも夜間屋外に疊を持ち出して、寝る者も多く見受けられた。

小松島港では、大地震後約三〇分位にして神田瀬川の水が急に引き始め、川底が見える様になつたと思つと、ゴーゴーと大きな音を立てて真黒の泡立つ大波が後から後からと押し寄せ、再び川底が見える程に引いたかと思つと、今度は前よりも大きい泥波が押し寄せて来て、最盛時には二条通りで腰までつかかる程の浸水になつた。住民は先を争つて日峰山、芝生山等の高所へ一目散に避難した。低地帯の道路では恐怖におののく人々の列が続き、死者も一名出した。

赤石方面では、大地震があつて約三〇分後に港の水が引いて底が見える様になつた。間もなく真黒の高波がゴーゴーとうなりを立てて押し寄せ、金磯では堤防すれすれまで水かさが増した。その水も又、急に引き始め、港の底が見える様になつたかと思つと次には以前よりも大きい波が打ち寄せ、地震によつて亀裂が生じていた田野川の三ツ井利を崩壊し、赤石港に寄港していた淡島丸（阪神通いの木造船）が高潮によつて押し流され、鉄橋に打ち当てられて滅茶滅茶に壊された（その船底は今もなお、田野川の底に放置されているとの事）。なお、陸地に押し寄せた海水は田野の竜王神社附近の田畑を水没する程に浸入した。

勢合の海岸近くの低地にあつた民家では、海水が大人の首の高さ位まで押し寄せたので流木につかまつている内に軒まで水かさが増し、急いで軒へ這い上がり難を免れた人もあり、稲むらの上に登っていた人の中には稲むらもろとも浮いて流された人もあつた。難を免れた人々は、潮の引いた時を見はからつて急いで赤石山へ避難した。

四ツ井利方面では岸壁に積んであつた約三、〇〇〇石の製材が、井利を越した潮流によつて立江川に流され、約六〇〇メートル上流の立江八幡神社裏まで流されていた。その上、赤石港に停泊していた二本マストの阪神通いの

大船が三隻も砕けて堤上に押し上げられ、残骸を横たえていた。また、赤石港の岸壁に積んであった製材の一部は和田津の三社裏まで流されていた。赤石港に於ける波高は第二波が最も高く約四メートルであった。

附近の民家は浸水を受けたので、住民の多くは故事にならって豊浦神社の境内に避難した。此の時「モット大きい津波が来る」との流言や飛語にまどわされ、続々と赤石山へ逃げ出したが、その中の老人は不幸にも四ツ井利の上で高潮に飲まれて他界し、立江川の上流小田橋附近で水死体で発見された。

松田新田及び太田川の川口附近では、堤防上約一メートルの高潮が激流の様に押し寄せ附近の民家は床上浸水し、此の海水は松田新田はもとより間新田の中道附近まで流入して、附近一帯は入江の様になった。

和田島の大手海岸では海岸より数百メートルの海水が急に引き始め海底が見える様になったかと思うと、急にゴーゴーと音を立てた大波が後から後からと押し寄せ、州端方面では低い堤防を這い上がって陸地に押し寄せ漁民の小屋を総なめにして押し倒し、その一部は引き潮と共に海へ持っていかれた。

### 体験記

坂野町 浅井 要

この地震を身をもって体験し、大津波もこの眼で見た実態を茲に申し述べますと、この日は風もなく晴れ渡った静かな星空の夜だったが、午前四時過ぎ、暁の夢を破る様に突然大地震が起こった。長い時間家がゆれたので、直ちに服装を整えたが戸外に避難する動作は取らなかつた。それも年老いた父を守る為と、我が家こそは絶対安全と思っていたからで、不安のうちにも静かに屋内に座っていたのであつた。近所の人々は空地に集ってふるえながら座り込んでいた。

朝八時になって附近を見廻りに行った。地震の被害は震度に比して小さく、倒壊した家は何処にも見受けなかつた。赤石と和田島の港に津波が押し寄せて海水が道路を越して陸地に浸入したとの風評があつたので、和田津の海岸へ見に行った。途中、池を埋め立てた田圃が三、五センチメートル低下した所や、幅一センチメートル、長さ一、二メートルの不規則な折線状の亀裂が各所で見受けられ、白濁した水の浸出した跡が生々しく残っていた。各所で屋根瓦がずれ落ち、壁に亀裂を生じ、柱が地盤から離れかけていた家もあつた。古い建物や軟弱な地盤の上に建てられた家は、特に損害が大きかつた。また、墓石や石垣等が倒れている所も見受けられた。これらの事から考えて、今回の地震は東西にゆれた事が想像されるのであつた。

一〇時前に和田津の海岸に着いた。海は泥海と化し、海岸から二〇〇メートルの沖合いにある通称「捨て石」の所まで干上っている。しばらくすると白波を立てた一メートル位の波が秒速一〇メートル位の速さで海岸に押し寄せてくる。その水面上二メートル位の高波が走ってくる。斯うして三〇分位の間に平素の満潮時よりも更に、二メートル位の高い水位になって、堤防もあと一メートル位になったかと思うと、又、引き始めて、三〇分位にして再び「捨て石」まで潮が引いて、その向こうで白波を立てている。私が見たのは津波の第四波かと思われるが実に物凄いものであつた。然しこの波も回を重ねるに従って波高は低くなつていったが、平素は一昼夜に二度の満干だのに此の日は半時間余りの間隔で満干を繰り返すのであつた。堤防が低いか高潮が一メートル高かつたら、海水は堤防を越して陸地へ侵入していたであろう。往時の大地震（宝永、安政）の折には海岸の堤防も不備だったので、相当甚大な被害があつたものと想像せられたのであつた。此の南海道大地震により沿岸一帯の地盤が七〇センチメートル沈下したので、今迄蛤取りをしていた所が干潮時でも水面下になって蛤取りも容易でなくなつた。その後海岸の堤防も一メートル高く増築補強したのであつた。

### 2 関係資料

#### (1) 徳島県における主な被災地区

徳島県災略誌（徳島地方気象台編纂）による

**橘町** 地震があつてから三〇分位にして津波が来た。台風の様なゴーゴーと云う音がして潮が押し寄せて来た。表面が泡立ち三〇センチメートル六〇センチメートルの高さの波が後から後からと続いて石垣を越す位に押し寄せて来たかと思つと、それが急に引き始めて海底が見える程になって、三〇分程して第二波がまた台風の様な音を立てて、真黒の泥波が押し寄せて石垣を越した。この時、海岸から遠く離れた橘小学校が浸水した。その後は三〇分位の間隔で繰り返していた。

**三岐田町**（現由岐町）地震後三〇分位して津波が来た。波高は四メートル位で、陸地へ押し寄せ人家を倒し田畑に浸水した。三〇分位して急に引き始め、由岐港では水深七メートルの海底が見える程になつたかと思うと、三〇分位して真

黒の泥波が前よりも高く押し寄せて来た。その後は次第に落ちついて来たがこの異常波は夕刻まで続いた。  
**日和佐町** 地震後三〇分津波が来た。およそ三〇分間隔で繰り返し、三回目目が最も大きく波高は四メートル位であつて、この津波により厄除橋が流失した。

**牟岐町** 津波が来るのに三〇分、引くのに三〇分位の間隔で繰り返して来た。役場附近の民家は大破し大きな船が四隻、堤上に乗り上げた。牟岐では津波の為に、民家六〇戸が押し流された。此の時の津波の波高は四、五メートル位であつた。  
**浅川村**(現海南町) 地震は六分位揺れ、一〇分位の後に津波が押し寄せて来た。三回目の津波が一番大きかつた。伊勢田川のコンクリート橋の中央から東部が二五センチメートル川上にずれ、津波の波高は四・七メートル、沿岸の家は流失、大破、浸水し、出漁していた漁船は四キロメートル程移動を繰り返していたとのこと。

浅川の津波記念碑 (昭和三十一年二月建立)

昭和二十二年二月二日午前四時一九分の満潮時、東経一三五度六分、北緯三三度、潮岬南南西約五〇キロメートルの海底を震源とする大地震あり。大山鳴動数分に及べり。震後一〇分余りにして津波襲来第一波の極点四時四〇分、波高約二・七メートル、第二波五時、波高約三・六メートル、第三波五時二〇分、波高約三・三メートルを記録す。死者八五人、傷者八〇人、住家流失一八五戸、全壊一六九戸、特に東町新屋敷、太田方面は殆ど流失し、全滅の状態となる。その他、船舶、漁具、家財及び農作物の流失被害は計り知れず、当時復旧を思う者なし。時、終戦後の物資不足の折、多方面に援助を受け、茲に銘を記して記念とする。

**穴喰町** 地震後一〇分にして津波の第一波が来た。波高は四メートル位、第三波が最も高く四・五メートル位。その後八回位来たが、次第に波高は低くなった。

**附記** 被害の最も大きかつた高知県中村市。全壊家屋二、四二一戸、半壊家屋七七三戸、全焼家屋六二戸、死者一七三人、負傷者三、三五八人。  
 この地震により愛媛県松山市においても、地盤の変動により道後温泉で約九〇日間、温泉の湧出が停止したとのことである。

(2) 北海道地震による徳島県下の被害調査 徳島県災略誌(徳島地方気象台編纂)による

郡市名	人		住家		浸水		堤防決壊	道路決壊	橋流失	船舶流失	田畑		木材	畑	木材
	死者	傷者	全壊	半壊	床上	床下					流出	浸水(町)			
徳島市	二	五	二	二											
名東郡	一		六	八											
勝浦郡	一	三	六	一〇											
那賀郡	六	二七	四七	一一八	九六	二四八	三	二	六	八三	四三一	四三〇	四三二	四三二	四三〇
三岐田	八	一六	七	一九八	四八八	一四四	一一	二	二	三三六	一一二	一一二	一一二	一一二	一一二
日和佐	一	一	五	七	二八	五八	三			四	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
牟岐	五三	四〇	一一	一九九	七五五	二三五		一		七八一六	六七二	九三〇	六七	六七	二、九三〇
浅川	八五	八〇	一八五	一八九	八五	一一五	四			八〇六二	二二三	二二三	二二三	二二三	二、九三〇
穴喰	九	五八	九	一〇七	九七	一五五	七	三		三五	九六	九六	九六	九六	二、〇〇〇
海部					四二	三八	一					一、〇〇〇			一、〇〇〇
名西郡	四	一	八	六			二	四			四八				
板野郡	一五	六	七	三											
阿波郡	一	二	六	三											
麻植郡	三	三	七	一〇											
美馬郡	三	三	七	一〇											
三好郡	一一	一五	三	二〇											
合計	二〇〇	二五七	四一三	六八九	一、三三三	一、〇六七	三九	一七	一一	三三〇	七八			一、七二一	二、二六、五四〇

## 三 南海丸の遭難事故

昭和三十三年一月二六日、南海汽船株式会社所属、阿紀航路第三上り便南海丸四七〇トンは一七時三〇分、乗客一三九名、花野船長以下乗組員二八名、計一六七名を乗せて南方からの強風による悪天候の中を押して小松島港を出港したのであったが、一八時二五分頃、無線電話で「キケン、キケン」の連絡を最後として、和歌山港にも入港せず遂に行方不明になってしまった。この知らせを受けた南海汽船小松島営業所はもとより、小松島市をはじめる小松島海上保安部、その他関係官公署は事態容易ならざるものと直感し、直ちに南海丸救助対策本部を小松島海運局に設置し、搜索・救難・情報・連絡等の活動を開始した。翌二七日は、夜明けを待ちかねて早朝より海上保安部の船艇、沿岸の漁船、海上自衛隊の艦艇及び航空機が互いに連絡を保ちながら、海空一帯の搜索活動を開始し、紀伊水道全域にわたって搜索したのであったが、終日の活動にもかかわらず遂に発見するに至らなかった。しかるに、はからずも同日夕刻、兵庫県三原郡南淡町沼島の西方海上で二五歳前後の女性の漂流死体を発見したので、この附近一帯を重点的に搜索した結果、沼島の西方四五〇メートルの海底に沈没している南海丸の船体を確認し、ここに海難史上前例のない全員死亡という未曾有の大惨事を招き、関係者一同を悲痛のどん底に陥れてしまった。翌二八日から救助対策本部を遭難対策本部とし、海上保安庁は巡視船を総動員して沿岸の漁船はこれに呼応し、海上自衛隊の艦艇及び航空機もこれを支援して海空一帯の搜索網を敷いて、遺体の搜索と収容に当たった。徳島県においても、小松島市と連携の下に警察官、消防団、その他各種団体、延べ一〇、〇〇〇名を動員して小松島港を中心に連日献身的な遭難対策作業が展開された。

二九日から、遭難者の遺体搜索の為に南海丸沈没地点の海底をマンガン漁法と潜水夫による遺体引き揚げ作業が行われ、三〇日以降も又、死体引揚げ作業が続く、続々と運ばれてくる遺体に接した新港地区は慟哭の街と化した。小松島市役所は連日、全吏員を動員して情報の蒐集、遺族との連絡、応待、案内、検屍の補助、遺体安置所の設置と管理、遺留品の蒐集と保管等の係を置いて、搜索打ち切りに至るまで懸命の努力をささげて遭難対策事業に協力した。

三月二二日、南海丸はサルベージ会社の作業船により横須海岸の沖合に曳航され、完全に浮揚せしめて検察官の検証を受け、和歌山市の遭難対策本部とも連絡を取りながら遺体の収容に当たったが、本市において収容された遺体九七霊、和歌山市に収容された遺体六一霊であって、懸命の搜索にもかかわらず、未収容遺体九霊を残して涙ながらに搜索を打ち切った。なお、引き取り人のない遺留品九七二点は、本市の民生課に保管して所有者が判明するに従って関係者に引き渡した。

この間、本市消防団は事件発生と同時に対策本部を小松島港岸壁に設置し、四月三〇日の遺体搜索打ち切りまで六〇余日の間、延べ六〇〇人を動員して献身的に活躍した。

五月一九日、南海汽船株式会社主催の下に遭難者一五八霊の合同慰霊祭が南小松島小学校講堂でしめやかに行われ、この事件は一応幕を閉じたのであった。

南海丸の沈没原因については、

- (1) 南海丸の航路は沼島の南を通って和歌山へ行くのに、その日に限ってなぜ沼島の西へ行ったのか。
- (2) 沼島の西四五〇メートルの地点でどんな理由で沈没したのか。

の疑問が残るのであるが、ただ考えられるのは南方からの強風の為、淡路島寄りの進路を取り、強風に流されて沼島の西へ来た時に鳴門海峡の急流による逆波を受けて転覆、沈没したのであるとの推測である。全員死亡と

いう悲しむべき結果を招いているので、当時の状況を探索する術がなく、南海丸の沈没原因は遂に迷宮に入ってしまったのである。

#### 四 暴風雨災害

毎年八月から九月にかけて台風が日本列島を襲う（時には季節はずれの例外もある）。この台風は、熱帯地方の島（マーシャル諸島やトラック諸島等）で、直射日光により熱せられた空気が局部的に膨張して軽くなり上空へ舞い上がった後海上から冷たい空気が舞い込んで台風の卵となり、大きく旋回し乍ら地球の自転に左右されて高緯度の北に向かって進み、次第に発達して直径数百キロメートルの熱帯性低気圧の暴風雨圏を作り、これが成長して台風となってアジア大陸の東部を襲ってくるのである。

通常七月頃は北太平洋の高気圧に押されて中国大陸又は朝鮮半島に進み、八月・九月には九州・四国に上陸する（時には近畿・東海上陸する事もある）。これらの台風は日本列島を横断して日本海に出て、緯度が高くなるに従って速度を増しながら次第に衰弱して熱帯性低気圧となり、やがて消滅するのが常であるが、稀には昭和二九年の台風一五号の如く日本列島を縦貫して日本の全土に大被害を与えたものもあった。それが一〇月ともなると大陸高気圧に押されて西太平洋を東に流され、日本列島から次第に遠ざかるのが常である。

台風の進行する圏内では暴風と豪雨と高潮を伴い、出穂期、又は収穫期の稲作を始め、家屋、堤防、橋梁、樞門、道路等の建造物に莫大な被害を与えるのである。

戦後小松島市に被害をもたらした暴風雨の通過経路とその大要を示す。  
 二四年 八月一八日 台風ジュディス 九州南部に上陸した雨台風であった。

二五年 九月 三日 台風ジェーン 本県の東部をかすめた記録的な豪雨の台風であった。  
 九月 三日 台風キジア 九州を縦断した長時間にわたる雨台風であった。  
 右のジェーン、キジアの二台風により勝浦川が氾濫し大被害をもたらした。  
 二六年一〇月一四日 台風ルース 鹿児島から広島に抜けた風台風であった。  
 二九年 八月一八日 台風五号 九州阿久根に上陸し四国を通過して神戸に向かう。本市の高潮四四センチメートル。  
 九州西岸を北上したBクラスの台風。  
 九州枕崎附近に上陸した稀に見るAクラスの台風。九州を縦断して大被害を与えた。小松島市に於ける最大高潮六五センチメートル。  
 四国を目指して北上したBクラスの台風。  
 台湾東方から日本列島を縦貫し北海道に抜けた。洞爺丸台風とも言う。  
 南南東の強風であって、この時、南海丸が遭難した。  
 潮岬の西から紀伊半島に上陸し中部地方を横断したAクラスの台風。小松島市の最大高潮七四センチメートル。  
 室戸岬附近に上陸し本県東部を通過して阪神に抜けた最大級の台風。  
 高知県安芸市に上陸し若狭湾に抜けたAクラスの台風。  
 四国の南を通過し志摩半島に上陸。本市に長時間豪雨をもたらした。  
 宮崎市附近に上陸し朝鮮半島に抜けた。  
 豊後水道を通過して広島に上陸。  
 高知県安芸市に上陸して淡路島西方に進む。  
 愛知県に上陸した季節はずれの小型台風だったが、降水量が多く小松島港では仮係留中の外材約四、九〇〇本が港外に流失、養殖ノリにも大被害があった。

### 第三章 社 会

九月 七日 台風一二号  
 九月 一三日 台風一三号  
 九月 一八日 台風一四号  
 九月 二六日 台風一五号  
 一月 二六日 強風  
 九月 二六日 伊勢湾台風  
 三三年 九月 一八日 第二室戸台風  
 三四年 九月 一〇日 台風二三号  
 九月 一六日 台風二四号  
 八月 二二日 台風一五号  
 九月 九日 台風一九号  
 九月 二三日 台風二四号  
 四二年一〇月二七日 台風三四号

- 四五年 八月二日 台風一〇号 高知県西部に上陸し、ゆっくり北進したBクラスの台風。
- 四六年 八月三〇日 台風二三号 南国市に上陸し徳島県を通過して阪神に抜けたAクラスの豪雨の台風。
- 四九年 七月 六日 台風八号 沖繩と石垣島を北上、東支那海朝鮮半島南端を東進。家屋浸水、土砂くずれ。
- 四九年 九月 八日 台風一八号 九州枕崎に上陸、豊後水道、愛媛県宇和島に上陸。家屋浸水。
- 五〇年 八月二二日 台風六号 迷走しながら徳島県の東部を北進し、神戸に上陸したBクラスの台風。
- 五一年 九月 七日 台風一七号 九州に上陸したAクラスの台風。徳島県では約七日間記録的な豪雨。
- 五四年 九月三〇日 台風一六号 室戸岬に上陸し本県を通過したBクラスの台風。家屋浸水。
- 五五年 九月一日 台風一三号 九州を縦断したAクラスの雨台風。家屋浸水。

1 ジェーン台風

(台風の名称は占領下では女性の名を附し(米国式)、独立後はナンバーで呼ぶ(上陸地点名のものもある)。昭和二五年八月、硫黄島附近で発生した。熱帯性低気圧が次第に発達して昭和二五年九月三日午前四時には九六〇ミリバールに発達し、足摺岬南東二〇〇キロメートルでジェーン台風となり、進路を北東にかえ午前一時には高知県室戸岬に上陸し、進路を北東にかえて本県の海岸線沿いに進行して猛威をふるい、正午頃、紀伊水道の西部を通過し午後一時二〇分神戸に上陸して日本海に抜けた。小松島市においてはこの日、午前七時には北東の風が次第に強くなり、午前九時には北北東の風となり、午前一〇時には秒速二四・八メートルの強風となり、午前十一時には北風となり、正午に北北西の風に変わり最大風速三六・七メートル、瞬間最大風速五五メートルに達し、雨量約四〇〇ミリメートルの雨台風であった。徳島県の被害総額一〇数億円、稲作の被害は作付面積の約五割、特に勝浦川、那賀川の沿岸地帯に甚大な損害を与えた。中でも勝浦町の被害は有史以来の甚大なものであった。

小松島市においては、勝浦川右岸の改修工事が完了していたので堤防の決壊を免れることが出来、幸運であった。この時の台風の被害は坂野町の記録によると左記の通りである。

- 海岸堤防 大手海岸決壊三〇〇メートル、大浸食七〇〇メートル、護岸崩壊五〇〇メートル、海水浸入三五〇町歩。
- 道路 決壊六カ所(五〇〇メートル)、樋門・橋等の破損、流失、全町の各所で多数。
- 農地 冠海水三〇〇町歩(収穫皆無)、冠淡水二〇〇町歩。
- 家屋 住家全壊二戸、住家半壊二二〇戸、住家流失三戸、浸水五〇戸、非住家全壊二六棟、半壊五〇〇棟。
- 漁業 漁船流失二三艘、漁具・資材・製品等多数流失。

この時、和田津の二ツ井利が決壊し、海水が松田新田、間新田及び湊地区にも浸入し稲田が海のようになり、坂野・和田島間の道路は海水に洗われ、この状態は五日間続いた。ジェーン台風後一〇日にしてキシア台風が襲来したので、再び徹底的に大損害を受けた。この二つの台風により和田島の大手海岸の浸食が甚だしく、一五〇メートル程あった砂浜が流失してしまった。

2 ルース台風

昭和二六年一〇月一四日、季節外れのルース台風がジェーン台風に似たコースで襲来した。この時の小松島市における被害は次のようなものであった。

- 家屋 全壊一戸、半壊二二戸、大破九戸、床上浸水二〇〇戸、床下浸水三三二戸。

耕地 冠水三六〇町歩、海水浸入七〇町歩、水稻倒伏六五五町歩。  
 損害額 一億二八三一万四、九四〇円。

### 3 昭和二十九年の諸台風と豪雨

昭和二十九年は豪雨と台風による災害の多い年であった。七月三十一日豪雨による櫛淵・湯谷山の崩壊、八月一日台風五号、九月七日台風一二号、九月一三日台風一三号、九月一八日台風一四号、その上、九月二十六日は台風一五号が襲来して日本列島を南から北に向かって縦貫し、戦慄と恐怖を覚えた。青函連絡船洞爺丸が遭難したのも、この台風一五号によるものであった。小松島市においては勝浦川右岸の改修工事も完了していたし、海岸の築堤も緒に付いていた関係上、被害を最少限度に食い止めることが出来たが、稲作の被害が甚大で農家を苦境に陥れたのみならず、その都度、水防団員と地元関係者の懸命の努力は永く記憶に残る所である。

### 4 第二室戸台風

昭和三十六年九月一六日、強力な台風が高知県室戸岬に上陸し、中心気圧九三五ミリバール、最大風速三八メートル、瞬間最大風速六七メートルの台風が本県東部の海岸線に沿って北上し阪神に向かって抜けたのであった。時あたかも高潮と重なっていた為に被害は大きく、小松島市においては家屋の全壊五戸、半壊二八戸、床上浸水二、八〇〇戸、床下浸水一、七二五戸、特に本市の川北・川南の低地帯は海水が逆流して氾濫し、交通も途絶し、人家は泥水の中に孤立する状態になった。この状態は後続の小型台風の為、九月二二日まで続いたので、炊飯に困った人を救済する為、市内の小学校の給食施設を利用して炊飯し、これを配給して救援活動をした。この時、

政府は災害救助法を発動して横須賀より救助物資を積んだ自衛艦三隻が派遣されて救済にあたった。

### 5 昭和四〇年の二三号と二四号の台風

昭和四〇年九月一〇日、台風二三号(中心気圧九五三ミリバール)が襲来。続いて九月一六日、台風二四号(中心気圧九五二・五ミリバール)、最大風速三五・八メートル、瞬間最大風速六五メートルが襲来。この時、南小松島小学校の南校舎や東出口のマーケットが倒壊し、市内の多くの家屋は屋根瓦を吹き飛ばされて大被害を受けた。